

ミュージズ

MUSE

akasaka mari

赤坂真理

ニューズ

赤坂真理

＊本人によるプロフィール
赤坂真理（あかさか・まり）

本名同じ、東京生まれ。カバラ誕生
秘数は11。自分で言うことでもな
いがカルトなアート誌「S・A・L・E
2」の編集を経て小説家とし
ての公式（？）デビューは一九九
五年の「起爆者」（「文藝」発表）
による、とされる。他の著書に
『蝶の皮膚の下』（河出書房新社）、
『ヴァイブレーション』（講談社）、『ヴ
ァニッシュ』（新潮社）、『コーリン
グ』（河出書房新社）。

ミューズ

平成十二年三月一日 第一刷発行

定価はカバーに表示してあります

著者 赤坂真理

発行者 和田宏

発行所 銚子文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三ノ二十三
郵便番号 102-8008
電話 (03) 3365-1221 (大代表)

印刷所 大日本印刷
製本所 中島製本

©Mari Akasaka 2000

万一、乱丁落丁の場合は送料当方負担でお取替えいたし
ます。小社営業部宛お送り下さい。

ISBN4-16-319040-6

Printed in Japan

ミ
ュ
ー
ズ

少し濡れた。

喜多見駅を出て短い商店街を駆け抜け、万年作業中の工事現場を見ながら左に折れる。

川は急にひらける。アスファルトの道にはさまれてた流れは、浅く、曲がりながら視界の果てる先まで続き、わずかな土手に紅い花をびっしりつけている。小さな花卉の群で覆われた土は、一面が濃いピンクに見え、風を受けてざわめく。花が揺れて緑の茎をピンクの中から顕すとき、胸騒ぎに似た感じをいつでもおぼえる。この季節の川原の風景は私にいつも、信じてもない天国というものと地獄というも

のを同時に思わせた。

通り雨をもたらしした雲が去って、陽がまた照り始めた。急に強い光を浴びたピンクの土手が、網膜に直接灼きついてくる。またゆるい風が吹き、大地が不定形に動いて、私の内をも蠢かす。補色の残像同士が食いあい、粘膜を粒立てる。残像を突破するように、走る。汗をかいた。五月は暑い。そのうえ寒暖差が激しい。毎日どの程度着たらいいのかわからなくて、ベストやカーディガンで調節する子も多いが私は制服のブラウスの下にキャミソールを着ていた。

毛穴から霧状の汗が噴き出し続けて、ブラウスと体の間の空気を熱くする。ポタンを上から、ひとつを残し外して走ると綿布が風をはらむ。細い肩紐だけでむき出しになった肩や胸の肌が、直接息をする。大気に残る水の粒子が、肌に貼りついて熱を奪ってゆく。橋を渡る。

川沿いの、狭い道二本分に圧縮された住宅地を抜けると、森は始まる。崖線と呼ばれる台地の斜面が、手つかずの森なのだ。森に来ると、喘いでいた肌が急に鎮ま

った。ひんやりした極薄の水の膜を一枚まとう。森の湿り気は、雨の湿り気とはちがう。森の薄暗さ薄明るさは、夕暮れどきとはちがう。

息を切らしたまま駆け上る。あの人に会える日はうれしい。滑る足場をローファ―でグリップする。高い梢が風になつて、戻つてくるとき大きな水滴をぽとぽと振り落として私は一瞬たちすくんだ。百メートルほどの斜面を上りきり、未舗装の路地を抜ける。すると、視界が急に遠くまで抜けて成城の街並みが現れる。あくまで平たく、清潔に、広さを十分にとった道に四角く切られて。

しよぼい商店街、川、急斜面と暗い森、屋敷街。

生まれ育った町の風景は、数十メートルの単位で貌を変える。まるで紙芝居のように展開し、つながりにゆるやかさがどこにもない。いくら見慣れても、何度走り抜けてもこう思う。

五分遅刻した。

いつも目を見て微笑む彼は、今日に限って私の目を見なかった。胸元がはだけた

ままなことに私は気づいた。悪戯心を起こし、ヘンに暑いですよねー、などと言いながらわざと、ブラウスで肌に風を送ってみる。彼はもう一度、あらためて目を伏せた。診察前に立ち話すふりをして、同じ動作を何度か繰り返すと、そのたびに彼の視線が揺れた。

診察室と内側でつながった受付のカウンターで、矯正歯科医は、今月分の処置料の領収書を書いている。私は診察室のドアを出て待合室で、カウンター越しに彼と向き合っていた。

様、という印刷の前に秋、島、とひよろひよろした点や線の組み合わせが私の名前をだんだんにかたちづくるのを見る、美、緒。続いて下段にやっぱりモヤシみたくひよろひよろした数字、だけどそれらすべてが、あの指から生み出されると思うと、何か特別の意味のあるエジプトのヒエログリフみたいで悪くない。矯正歯科医

の手をじつと見つめて、微かな匂いまでを嗅ぎ取りたいと私は願った。先生は笑うと目の下にうつつら皺がでる、でも手は皺が全くなく皮膚がきめ細かてふっくら瑞々しい、あんなにいつも、洗ってばかりいるのに。

衛生士も受付も、他の患者もいない。診察時間は終わって自分が最後の患者だった。私は話がしたかった。

「あの、訊いていいですか？」

ん？ と矯正歯科医は口を開かず喉の奥で音を出す。眉が連動する。

「いつも不思議だったんですけど」

目は大きめの、少しだけ垂れ目。少しだけ、離れ気味。

「先生ってすごくい匂いがする。何、使ってるんですか？」

先生は顔を上げた。鼻の隆起がはじまるところが窪んでいる。いつも彼を下から至近距離で見るとき、その窪みを私は見ている。少年漫画っぽい鼻って思う。マスクから出て、いちばん繊細に能弁に彼を語る場所。集中するとき眉間に皺が寄って、

そうするとわずかだけれど肉が押されて窪みを浅いラインに変える。歯科医は眉間が命。一人の男が私のためだけにそこに皺を寄せることは、甘く切ない気分。その窪みが、彼を勝ち気な感じ、文字通り鼻っ柱が強い感じと、甘ったれの感じと、両方に見せて好きだった。マスクを取ると三十四歳にしては幼さの残る顔で、だから無精髭を生やしているのだと思う。無精髭を、いつも適当な無精髭に見せるのは手間と時間のかかることだと私は知っている。幼さ、勝ち気さ、育ちのいいおっとりした感じとちよつと怠惰でたるそうな感じ、それと長身や、半袖から出る体毛が薄くてなめらかな筋肉のついた腕、手の大きさとその先についた完璧に清潔な爪、そういうものたちが合わさって、この人は私の心を動かす何かを持っていた。

「コロンとか？」

答えを私に与える前に、彼はまぶたを微妙に伏せ、揺らす。まぶたをもう一度引き上げ私を見る。微妙に揺らぎのある視線で。まつげの隙間からの瞳で。領収書を書く手が止まっている。首を少しなめ前に倒したまま、目だけ少し上目遣いで私

を見る。短い間、私は言葉を失っている。

「何もつけないよ」

少し眩しげに目を細めた、彼の口元に笑み。口角の数ミリの動きだけで人好きのする顔になる。

「医者は何もつけない」

美しくならんだ齒がのぞく。

「そうじゃなくて」

そうじゃなくて手、そうじゃなくて、て手、て手、てて、てててててて、

上の齒の裏側に舌を当てて、言いにくい同じ音を二つつくろうとしたとき、ひとつ目で舌が引つかかって動かなくなってしまった。頭の中の音だけが先を走って私を置いていく。焦っても舌はとれない。とろうとすると痛みがあり、粘膜の表面にある薄い膜が破れ表面を走っている細い筋が数本ぶちっと音を立て切れる。それでもまだ、舌をとらえている金属突起がある。頭の中で、先ゆく音の無限ループが、

はじまろうとしている。またここにはまってしまったこと、それがよりによって今であることを私は呪う。無理に断ち切り次の言葉を言い出そうとした瞬間だった、とつぜん、白銀の光が部屋に満ちた。声と意味の裂け目みたいに感じた。頭の中に白い亀裂が走って、何も考えることができない。口の中が干からびて舌も唇も動かすことができない。この体験はなんだっけなんだっけと、記憶を探そうとして頭は回転しているけど言葉だけが遊離して何の答えも出ない。意味の塊みたいなものが下に渦巻いている。

乾いた音が轟くのに、長い間があった。

それが外からの音であることを先生を見て確認して、少しだけ安心した。あ、そうだ、雷だ、雷だったかみなりかみなり……理解がやってきて、でも言葉ではそう考えているけど言葉だけが空回りする。時間を戻したい。びしつ、というような乾いた音は、この世の不吉なことのすべてだ。一瞬の閃光が去ったあとも電磁を帯びた光の粒子が部屋に満ちている。わかった本格的な雨が近付いているのだ。わか

った本格的な雨が近付いているのだ、と頭の中で繰り返し、声にする。わかった、わかったわかったわかったわかった……

「どうしたの？」

頭の中を、強制的に占める光景がある。ピンクの土手、草木の一本も生えない岩肌、白い装束、足袋の小さな足もと、すべての時間がいっしょにある、私は過去の小さな体で世界を見ており、世界は子供の背丈でひどく小さく区切られた枠に入れられ私は抱きかかえられるものを知るだけで、と思うと、未来の全知の視点からすべてを見ている、現在にもいるが体は動かない、すべてが等価、カプセルのような球に入って、さらにその中の小さなカプセルの中に閉じこめられて透明な立体構造に配置されて……

「どうしたの？」

先生の声が動揺している。

「真っ青だけど」

「かみなりはだめなんですかみなりは、かみなりは……」

へんに思われたくない一心で繰り返した。こんなふうに、なけなしの自分を振り絞るように演技したのは初めてだった。演技をしていたら涙が出てきた。震えが止まらない。

「しばらく、座ってなさい」

先生は待合室のカウチを指した。今一度、辺りのものすべてが煌々と照らされ恐ろしい立体感で浮き上がった。そして閃きが、私にも訪れた。今を逃したらチャンスはない。雷鳴が響いた。悲鳴を上げて、先生の手を強く握りしめる。近い。握った手と手に額を押しつける。指と指の間を涙が伝って、濡れているのが誰の手なのかわからない。ごめんなさいかみなりだけはかみなりだけは、へんですよねこんなへんですよね、と思いつく限りの言い訳を口走りながら手を離さない。誰にでも理屈抜きに怖いものはあるよ、と先生は言って、手を握られているのを嫌がる筋肉の動きはそこになかった。

長い間、指先だけで彼を読んできた私にはわかる。彼は拒否しない。私は受付のカウンターをプリーツ・ミニで乗り越えた。向こう側へ落ちる力で彼の肩を押し沈める。カウンターの下の、受付嬢が脚を収める空洞に私たちはうずくまる。矯正歯科医は沈黙している。胸の中で、私は甘い震えに満たされていた。

もう一度見つめ合ったのを合図のように、ふたつの唇が吸い寄せられて重なった。歯茎を探り、唇と皮膚の境を探り髭と皮膚の合間を味わう。頬や首筋、いろんなところに唇を這わせた。先生の耳朶は涙の滴のかたちをしていてそこだけすっぽりと口の中におさまる。舌で転がしていると先生が低いうめき声を上げた。タイミングを計って、急に私は体を離した。

「ごめんなさい」

身を翻した。カウンターを逆に乗り越えようとするとき、

「傘が、ないだろ？」

左手首を強く引かれて、私は首から後ろに折れ上体は円弧を描き、目は開いたま

ま天井を見た。かすれた声で、乱暴な言い方で、別の人みたいだった。頭頂から彼の肩に落ちる。オス、という感じがしてその声をずっと聞いていたい。口の端で、かすかに勝利の笑みを浮かべた。次の瞬間には、頭は治療のときいつもされるように胸と腕との間に抱きかかえられていた。無重力の刹那が終わって、なのに地を打つ衝撃がなくて音だけこの世に戻ってくる。雨の音に壁も床も消え去り、ただ細かな泡の生まれては消える体の表面が、彼を感じる。

手が、私の唇を軽く覆っている。親指のつけ根の柔らかな肉。私は歯を立てる。強く噛む。二人に声はない。首筋に息を感じる。私の唇や舌や粘膜は、彼の手の指紋を知っている。それが私を擦っていった記憶が蓄積されて、今にでも迷路に似たパターンで視界をいっぱいにすることができる。そのパターンは迷路に似ているがもうあまりに親しみがあつて、幾通りもの出方を知っており、ロジカルな回路としてループの世界から私を救う。

「先生の手、なんでこんないい匂いなの？……って、言おうとした」